

CONTENTS

TOPICS

- ① 工学系進路支援オンラインイベント
「女性が拓く工学の未来」
- ② トップセミナー
「理工学分野のダイバーシティ推進のために」
- ③ NITech CAN 女性研究リーダー養成塾
第2回研究力向上セミナー「共同研究入門」
- ④ 産業論「ダイバーシティセミナー」

⑤ 「女性が拓く工学の未来賞」
授賞式

REPORT 「女性が拓く工学の未来賞」
受賞者の声

COLUMN ワーク・ライフ・アンバランス

TOPIC 1 工学系進路支援オンラインイベント「女性が拓く工学の未来」

2020年12月18日から2021年3月31日まで、女子中学生・高校生・大学学部生を対象に工学進路支援イベント「女性が拓く工学の未来」をオンラインで開催しています。このイベントは、岐阜大学工学部・豊橋技術科学大学の協力のもと、本学ダイバーシティ推進センターが主催し、学術及び技術開発の世界で活躍する女性リーダーによる講演動画と、各機関の研究紹介、学生生活紹介の動画を公開し、幅広い工学の魅力伝える目的で企画しました。

本学からは、特任教員でもあるトヨタ自動車株式会社落合清恵氏（本学OG）による研究室紹介動画と、創造工学教育課程一年生3人による女性研究者インタビュー動画の二本を「工学の扉を開こう」と題して公開したほか、学生生活紹介として、女子学生団体「彩綾～SAYA～」と「学生フォーミュラプロジェクト」が活動紹介の動画を公開しました。

研究室紹介動画では、電気・機械工学科佐野明人教授、平田晃正教授、生命・応用科学科神取秀樹教授、社会工学科秀島栄三教授の研究室を訪問し、最先端の研究についてご紹介いただくとともに、研究室で学ぶ女子学生の皆さんに研究の魅力をお話いただきました。また、女性研究者へのインタビュー動画では、情報工学科武藤敦子准教授、物理工学科宮川鈴衣助教にご協力いただき、研究紹介のほか、工学を専攻した経緯や、女子中高生へのメッセージをお話いただきました。

本イベントは新聞でも取り上げられました。1月30日中日新聞朝刊25面でイベント情報が掲載され、2月8日には、日本経済新聞朝刊19面・日経電子版「いよいよ、女性STEM人材」で、加野泉ダイバーシティ推進センター特任准教授の談話とともに、女性研究者へのインタビュー動画が紹介されました。これまでのサイト訪問者数はのべ12,653人（3月16日現在）で、愛知、静岡を中心に、北海道から沖縄まで全国からアクセスがありました。アンケートでは、「コロナで説明会が軒並み中止になり、不安感がありましたが、前向きな意欲が出てきました（高2）」、「女性研究者や学生のお話がとても印象的で、ものづくりにたずさわる面白さがよく伝わってきました（中3）」などの声が寄せられました。



TOPIC 2 トップセミナー「理工学分野のダイバーシティ推進のために」

2021年3月10日、トップセミナー「理工学分野のダイバーシティ推進のために」をオンライン開催しました。本セミナーは、ダイバーシティ研究環境の実現に向けた意識啓発を目的とするもので、学長はじめ本学役員、教育類長、センター長等で構成されるダイバーシティ推進委員会委員及び学内申込者31名が受講しました。

大学・研究機関における男女共同参画事業に大きな功績のある大学共同利用機関法人情報・システム研究機構藤井良一機構長を講師に迎え、男女共同参画推進の必要性和、組織の課題を把握し改善していくため導入すべき視点についてご講演いただきました。本学のデータも組み入れた解説とともに、英国のアテナスワン等、海外の施策にも触れられる実践的なご講演内容に、受講者からは、「理工学分野の実態を踏まえており、本学の課題把握と今後の発展のために多くの示唆を得られた」という感想が寄せられました。本セミナーの録画を3月31日まで学内限定のストリームで配信しています。



TOPIC 3 NITech CAN 女性研究リーダー養成塾 第2回研究力向上セミナー「共同研究入門」

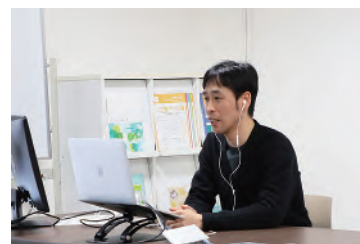
2020年12月9日、女性研究リーダー養成塾・第2回研究力向上セミナーでは、共同研究をすすめるための入門編として「共同研究入門」をオンライン開催しました。

初めに、物理工学専攻、ダイバーシティ推進センター長 呉松竹教授より、「共同研究を進めるために」と題して、共同研究を行うメリットについて、資金面、研究成果の普及、学生の教育という三つの側面から説明されました。

続いて、電気・機械工学専攻 田中由浩准教授が「研究活動と共同研究の接点」と題して、企業側のニーズを吸収しながら自分の研究を発展させていくための戦略について、実際の共同研究の成果を示しながらお話しされました。

最後に、産学官金連携機構 片山精特任助教より、共同研究の契約内容や研究費を決める際の企業との交渉サポートや、NEDOの若手研究者支援事業の案内など、本学産学官金連携機構による支援についてご紹介いただきました。

学部生、教員等19名が受講し、受講者からは、「共同研究をどう始めるかなど、今まで知らなかったことを実例とともに知ることができ、今後の見通しの参考になりました。」「共同研究のあるべき姿を知ることができ、自分にとっての良い道標となると感じています。」との感想が寄せられました。



電気・機械工学専攻 田中由浩准教授

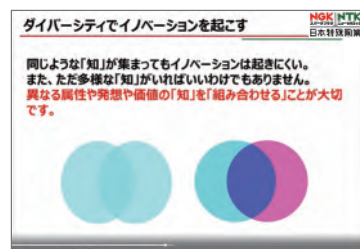
TOPIC 4 産業論「ダイバーシティセミナー」

2020年11月19日から30日にかけて、共通科目「産業論」において、「ダイバーシティセミナー」オンライン講義が行われました。この授業は、工学技術者として弁えるべき産業社会への責任と自分のキャリアについて考える能力をつけることを目的とするもので、工学部第一部二年次の必修科目であり、約950名が受講しています。

講師に、経済産業省「新・ダイバーシティ企業経営100選」の一つにも選出された日本特殊陶業株式会社より、戦略人事部長の山口智弘氏、戦略人事部ダイバーシティ推進課長の平野なつき氏をお迎えしました。

講義では、ダイバーシティとは何か、なぜ企業はダイバーシティを推進するのか、企業はどのようにダイバーシティを推進しているのかという三点にフォーカスし、ダイバーシティ推進によるイノベーション創出について深く掘り下げました。講義の最後には、戦略人事部長山口氏から、就職や進学など、学生が今後迎える人生の大きな岐路に向けて、大学2年生の今のうちに何を考え、行動しておくべきかというアドバイスが贈られました。

ダイバーシティの基礎的な知識を学ぶだけでなく、次世代のダイバーシティ推進の担い手として、自分ができることを深く考える機会になりました。



TOPIC 5 「女性が拓く工学の未来賞」授賞式

2021年2月3日、2020年度「女性が拓く工学の未来賞」授賞式が行われました。この賞は若手女性研究者を表彰することにより、その研究意欲を高め、将来の学術研究を担う優秀な女性研究者の育成を図り、これによりダイバーシティの推進に資することを目的するものです。

本年度は、優秀賞に小寺紗千子特任助教（電気・機械工学専攻）、奨励賞に櫃本聡子氏（社会工学専攻 博士後期課程3年）と久保美和子氏（生命・応用化学専攻 博士後期課程3年）の3名が選出されました。2月3日に学長室で授賞式が行われ、受賞者に表彰状、トロフィー、副賞が授与されました。



< 優秀賞 > 小寺紗千子特任助教

REPORT 「女性が拓く工学の未来賞」受賞者の声

優秀賞



小寺 紗千子 特任助教
電気・機械工学専攻

この度は、このような栄誉ある賞をいただきまして、誠にありがとうございました。本学修了後8年間、研究からは遠ざかっておりましたが、2016年より再び母校にて研究に携わる機会をいただきました。日々研鑽してきた成果が受賞につながりましたことは、平田教授をはじめ、研究に従事するにあたり日々温かくご支援いただいている皆様のおかげであり、心より感謝申し上げます。

私は、これまでに電波の安全性や熱中症リスク評価に関わる研究を中心に、特にヒトの温熱生理応答のモデル化に注力してきました。ヒトの温度上昇をより正確に推定するためには、体内で起こる血管拡張や発汗といった生理応答まで考慮することが重要になります。この技術をさらに発展・応用することにより、安心・安全な社会へ貢献できるような研究者を目指して、ますます精進していきたいと思います。

奨励賞



櫃本 聡子氏
社会工学専攻
博士後期課程3年

この度は、栄誉ある賞を賜り、とても光栄です。建築の「歴史」を相手にしている身で「未来」と名の付く賞をいただくとは思ってもおらず、大変驚きました。至らない私にご支援下さる皆様、そして家族に感謝しております。

日々の仕事や研究の中では、工学においても女性研究者、技術者の先輩方のご活躍により、女性のフィールドは着実に拓かれてきたと感じています。一方で、女性が自身のキャリア形成を考えた時に、迷いや不安なく目標に向える環境は、未だ整っていないことも感じます。自身は周囲の皆様に恵まれ、研究、仕事、家庭、育児のいずれも楽しみながら向き合える環境におり、それが今回の受賞に繋がったと思いますが、女性に限らず意欲ある人が多様なキャリアを当たり前に描ける未来を願ってやみません。まずはこの賞に恥じぬよう、後進の方々のロールモデルの一つであれるように、牛の歩みでも引き続き研究、仕事に精進して参りたいと思います。

奨励賞



久保美和子氏
生命・応用化学専攻
博士後期課程3年

奨励賞をいただき誠にありがとうございます。私は、本学の博士前期課程を修了後、社会人になってから博士後期課程に改めて進学しました。その間には、実験や研究といった業務から離れていた期間も長くありました。このような私が受賞できたのは、所属しております研究室の先生方のご指導や、学生さんたちのサポートのおかげであると大変感謝しております。私は現在、混合ガスから水素ガスを分離回収する「分離膜」の研究をしています。分離膜の技術の応用先のひとつに、「人工光合成」があります。この技術は、植物と同じ反応を人工的に再現する技術であり、太陽光エネルギーを使って水を水素と酸素に分解し、分離回収された水素と二酸化炭素から有機化合物を合成します。人工光合成の技術は、環境問題の解決を目的とした水素社会の実現の一環として研究されており、こういった大変意義ある研究の一端を分離膜の研究を通じて担えていることを誇りに思っております。今後も、社会貢献を実感しながら人生を歩んでいけたらと考えております。



第14回 家族の存在

加藤 正史

1998年 名古屋工業大学卒
2003年 同大学大学院修士 博士 (工学)
2003年 名古屋工業大学 助手
2008年～現在 名古屋工業大学 准教授 (その間リトアニア国
ビリニュス大研究員、名古屋大学客員准教授 兼任)

パンデミック

COVID-19は高齢者や基礎疾患のある身体的に弱い人に高いリスクを伴い、一方で身体的に強い人には比較的低いリスクとなるパンデミックを引き起こしています。その結果、自身もしくは同居の家族が身体的弱者である場合は、感染対策を重視する傾向にあります。逆に弱者が身近にいない身体的強者は、それほど対策を重視しないような状況になってます。私もパンデミック当初は、COVID-19が子供には低リスクであることがわからなかったの、「子供がいなければ気が楽なのに」などと思ったものです。一人暮らしであれば感染ルートを自分で制御でき、たとえ感染したとしても自宅で寝ていればよく、そしてさらに重症化しても自己責任として自分を納得させられたように思います。

家族という弱み

このようにパンデミックに限りませんが、危機的な状況においては家族の存在は自分の弱みになり、独り身の方が気楽です。ところが、フィクションの世界の話で恐縮ですが、映画『ゴッドファーザー』シリーズに出てくるマフィアたちは、危機的な状況が日常であるにも関わらず家族を作ります。そして家族の存在を弱みにされたり、家族同士ですら抗争を始めたりします。そんなことなら家族がいなくてマフィアとして強くなれるのでは？という感想を抱いてしまいます。この作品はフィクションとはいえ歴史を基にした小説を映像化しているので、現実も遠からずの状況だったのではないかと想像します。一見強そうに見えるマフィアであっても、家族を必要とする弱さ(?)があったのでしょうか。

なぜ家族を持つのか

家族の概念については地域や時代によって異なり、その多くの事例・考察がWikipediaでも紹介されてます [1]。そしておそらく地域や時代が同じであっても、個人間でも家族をどのように捉えているかは異なるはずで、自分ですら、家族の存在を定義することや、なぜ家族を持ち子供を育てることになったかを言語化できるかといえれば不可能です。しかしながら、このパンデミックは改めて家族の意味を考える機会になりました。その未だにその答えは出せていませんが、子供の成長に伴い、いつか親の方が弱者になるときが来ます。その時は子供が、家族と親の存在の意味を考える番になるのだと思います。



[1] Wikipedia「家族」<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%AE%B6%E6%97%8F>

発行

名古屋工業大学ダイバーシティ推進センター

〒466-8555 名古屋市昭和区御器所町

TEL | 052-735-5121, 052-735-5279

文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(特色型)」

2021年3月発行

E-MAIL | diversity-crew@adm.nitech.ac.jp

URL | <https://diversity.web.nitech.ac.jp/>